

江戸幕末の本屋「丸屋徳蔵」について

一

文久三年に江戸で刊行された『粹興奇人伝』（仮名垣魯文・山々亭有人輯、春廬屋幾久校合、一恵齋芳幾画）は、当時流行していた三題噺の連のメンバーの作品と肖像及び略歴を伝える書物である。三題噺は、初代三笑亭可楽が文化元年に始めたものだが、一時下火になった後、文久年間に仮名垣魯文・山々亭有人ら戯作者、柳亭左楽・三遊亭円朝などの落語家が粹狂連・興笑連という二つの連を組織して盛んに活動し、幕末の江戸で大流行させた。これらの連の活動は落語に留まらず、参加者が相互に影響しての戯作や落語の創作が行われるなど、文化サロンとも言うべき場となっていた。

『粹興奇人伝』には、これらの連の中心人物が掲載されており、幕末江戸の戯作文学界を研究する上で不可欠の資料である。本稿で取り上げた丸屋徳蔵とは、この『粹興奇人伝』の版元である。丸屋徳蔵については、山岸宗『五世尾上菊五郎』（文学堂・明36）に以下の記述がある。

其二 落合芳幾翁談話

（略）その当時（筆者注・五世菊五郎の羽左衛門時代）嘉永四（文久三）、条野採菊さんが、丸屋徳蔵といふ名義で絵双紙屋を開いて居りまして、是が屢々勝田さんへ出入りしました。私はまたこの丸徳の絵を始終絵いて居りましたので。この時に勝田が丸徳を呼びまして、「己の家は羽左衛門が鼻貞だから、己の内の為めに、一つ羽左衛門の絵を拵へろ。」と言ふ事をして、それから私が羽左衛門の絵を度々書くやうになりましたから、また羽左衛門の錦絵の出るのは、この丸徳に限るやうになつたのでございます。（略）

談話を語っている落合（一恵齋）芳幾は国芳門下の浮世絵師、文中の条野採菊とは戯作者山々亭有人のことで、両者とも幕末文化サロンの最重要メンバーとも言うべき

存在で、勿論『粹興奇人伝』にも挙げられている。「勝田さん」というのは、サロンの経済的パトロンであった豪商勝田で、『粹興奇人伝』には「春廬屋幾久」の名で掲載されている。管見の限りでは、山々亭有人が本屋をやっていたという証言はこの芳幾の談話の外になく、事の真偽に大いに興味をそそられる。また、彼の談話を信じれば、この丸屋徳蔵の出版には粹狂連・興笑連仲間が関与していたことになる。山々亭有人との関係も視野に入れつつ丸屋徳蔵の周辺を探り、同時に明治維新前後の本屋がいかなる変遷を遂げるのかを具体的に検証してみたいと思う。

二

本屋としての丸屋徳蔵の創始が万延元年であることは、『諸問屋名前帳』（国会図書館所蔵『旧幕引継書』）の地本双紙問屋の部から明らかである。この『諸問屋名前帳』は、天保年間に解散を命じられた問屋仲間が、嘉永四年に再興されるにあたり作成された各種問屋仲間の一覧である。嘉永四年の再興時に加入していた問屋の名前に加え、その後明治初頭までに行われた名義変更・追加加入についても記入が見られる。同書の中で本屋に関係するのは「書物問屋」と「地本双紙問屋」の部分である。それらは更に、天保の改革以前の間屋仲間に加わっていたいわば老舗とも言うべき本屋（本組もしくは古組）と、再興時に初めて参加した新興本屋（仮組もしくは新組）の二種に分割される。即ち、嘉永四年の本屋には、①書物問屋本組・②書物問屋仮組・③地本双紙問屋本組・④地本双紙問屋仮組の四種があったわけである。このうち、①は「諸問屋名前帳」にないが、それを補うものとして嘉永六年頃成立の『書物問屋名前帳』（国会図書館蔵）が存在する。以上の資料に掲載された幕末期の江戸の本屋数を数えると、書物問屋百七軒・地本双紙問屋二百一軒に上る。

丸屋徳蔵の名前は、③地本双紙問屋本組の十三軒目に見られる。

一 地本双紙問屋

万延元年申年閏三月廿七日因幡守内此与八勝手二付徳蔵え譲渡尤幼年二付父源三郎後見相立候願濟翌廿八日申渡

馬喰町式丁目庄兵衛店 西村屋与八
馬喰町式丁目文七地借 丸屋徳蔵
幼年二付後見実父

室町壹丁目利兵衛地借 源三郎

この記述によれば、丸屋徳蔵は万延元年に西村屋与八から株の譲渡を受けて地本及紙問屋になったのである。西村屋与八は、江戸の代表的な錦絵・草双紙・書物の版元として知られる。錦絵出版に関しては、錦絵初期の宝暦期から作がみえ、以後主要浮世絵師はほとんどこの版元から刊行している。寛政年間からは草双紙の出版も多くなり、黄表紙から洒落本・滑稽本まで幅広く刊行している。更に、西村屋与八は『書物問屋名前帳』にも「馬喰町二丁目庄兵衛地借 永寿堂 西村屋与八」とあり、①書物問屋古組の一でもあったことがわかる。このように名門本屋とも言うべき西村屋与八であるが、その出版の下限は大保年間から嘉永元年頃であるとされる。これは、万延元年に株が丸屋徳蔵に譲渡されたことに矛盾しない。

『書物問屋名前帳』には株の譲渡や名義変更についての記述がないので、丸屋徳蔵が書物問屋株も譲り受けたとの確証はここからは得られないが、後の資料で丸屋徳蔵が書物問屋と名乗っていることから、地本及紙問屋株と同時に譲渡されたと考えていいだろう。

次に、万延元年に開業した丸屋徳蔵が何年まで事業を継続していたかを本屋仲間や組合に関する資料から辿ってみる。

まず、元治元年と推測される書物問屋・地本及紙問屋の廻章に丸屋徳蔵の名前がある。この廻章というのは、問屋仲間再興後、緊急の連絡事項が生じた場合、行事が回覧し各問屋が捺印したものである。この廻章の日付は「子八月廿九日」で、問屋再興後の子年という元治元年か明治九年であるが、明治九年には問屋仲間が存在していないため、元治元年が適当である。この廻章は八十八の問屋に回され、そのほとんどが書物問屋である。丸屋徳蔵はその三十四番目に以下のようにあり、『諸問屋名前帳』の記述と同様、室町一丁目の丸屋源三郎が後見であることがわかる。

丸屋徳蔵殿(印) 室町壹丁目丸や源三郎方同居仕候御詫二八届出実□可申

丸屋徳蔵は明治維新も無事乗り切ったようだ。明治六年官許の『戊辰以来 新刻書目便覧』(梅巖堂・万青堂、明7)付録「東京府下書物問屋姓名記」には百四十五軒

の本屋名が並んでいる。この姓名録は、明治五年に出版条例が改正されたのに伴って組織された新たな問屋組合の組合員名簿と一致すると考えられる。丸屋徳蔵は「室町壹丁目 関山 丸屋徳蔵」と記され、この新組合に加わっていたことがわかる。更に、姓が関山であり、住所が馬喰町二丁目から、嘉永・元治の資料では後見の源三郎の居所であった室町一丁目に移動していることも判明する。しかし筆者の現在までの調査では、この資料以後、丸屋徳蔵の名は人名録や出版社関係名簿に見られなくなっている。

本屋に関する資料から伺える丸屋徳蔵については以上の通りなのだが、残念ながら西村屋与八からどのように株を移譲されたのかという具体的経緯は不明である。しかし、西村屋与八のような大本屋を資金力のない一般人が引き継いだとは考えにくい。そこで、『諸問屋名前帳』で後見となっている「実父源三郎」に注目した。もし彼が本屋を経営するほどの経済力のある商人であるならば、『諸問屋名前帳』の他の職種にも掲載されていることが予想される。調査の結果、丸屋源三郎・徳蔵に係る記述は、以下の数例が見つかった。

下り鯉節問屋	室町壹丁目	利兵衛地借	丸屋源三郎
同町	半兵衛地借	丸屋次郎兵衛	
品川町裏河岸	地借	丸屋喜三郎	
慶応三年十月地主代			
慶応三年四月代	同人悖徳蔵事喜三郎		
糠仲間	室町壹丁目	利兵衛地借	丸屋源三郎
元治元年十月休業			
慶応三年再業			
炭薪仲買	品川町裏河岸	大助地借	丸屋喜三郎
下り水油問屋	品川町裏河岸	大助地借	丸屋喜三郎
同町	五人組持地借	丸屋卯兵衛	
万延元年四月甥譲渡			
水油仲買	品川町裏河岸	大助地借	丸屋喜三郎
住吉組荒物問屋	室町一丁目	利兵衛地借	丸屋源三郎
文久三年十一月加入			

本屋丸屋徳蔵の後見丸屋源三郎は、室町一丁目で鯉節・糠を扱う商人であった。文久三年には新たに荒物問屋にも加入しており、安定した経済力を有していたことが想像

できる。品川町裏河岸の丸屋喜三郎は、「同人倅徳藏」と下り鯉節問屋の条にあるため源三郎に並べて挙げてみた。先に挙げた地本双紙問屋の名前帳では、丸屋徳藏の実父は源三郎であった。一方、鯉節問屋の名前帳では、徳藏は丸屋喜三郎の倅ということになっている。当時丸屋徳藏が二人いたということが全くあり得ないとは言えないが、万延元年に実父後見で本屋業につく時「幼年」と判断された人物と、慶応三年に「倅」として父の名と職業を継いだ人物が同一であると考えられるのが自然であるし、そもそも万延元年から慶応三年という僅か七年の間に、同族中に同名の者が二人いたとは考えにくい。徳藏が同一人物だったとして推定できることは、徳藏は源三郎の実子、喜三郎の養子という関係である。そうであれば、源三郎のことを単なる「父」ではなく「実父」と記述していることにも納得がいく。現在のところは、このように推定しておく。

徳藏の実家、鯉節商丸屋源三郎についても些か知り得た。鯉節問屋組合には、地廻り鯉節塩干肴を扱う小舟町組と、下り鯉節塩干肴を扱う浜吉組があった。浜吉組は以下の十軒によって組織され、寛政年間に発足した。

小津清左衛門・大橋太郎次郎・喜多村富之助・丸屋(関山)喜三郎・丸屋(関山)源三郎・丸屋次郎兵衛・伊勢屋(高津)伊兵衛・尼屋(榊原)伝次郎・小松屋彦兵衛・住吉屋伊兵衛

浜吉組は、小舟組が中小問屋の集団であったのに対して、下りものを扱うことのできる大規模な鯉節問屋が加入していた。『諸問屋名前帳』に見られた丸屋は三軒ともこの時から問屋仲間に加わっており、喜三郎・源三郎の両軒とも姓は関山である。

江戸十組問屋は、文化十年に六十五組・千九百九十五人に株数が固定された。幕府に年々冥加金を上納することの見返りに、問屋の新規参入を禁じるためこの千九百九十五人が株札を得たのである。鯉節塩干肴問屋もその一つであり、三十四人が参加していたことが判明する。前述の三軒の丸屋も含まれている。

品川町 丸屋喜三郎 (十六番目に掲載)

室町一丁目 丸屋治郎兵衛 (十八番目に掲載)

室町一丁目 丸屋源三郎 (三十四番目に掲載)

何によって掲載順序が決められているのかは不明だが、源三郎が最後に配されているのは、組合を代表するような中心的な問屋であったからだろうか。また、文政七年の『江戸買物独案内』(中川芳山堂)には、鯉節商が三十五軒あり、そこでも丸屋喜三郎(日本橋釘店)・丸屋治郎兵衛(日本橋室町一丁目)・丸屋源三郎(同)が名を

連ねている。

鯉節問屋組合は、天保の問屋仲間廃止・嘉永の仲間再興を経て、明治を迎えた。明治十三年には小舟組・浜吉組が合併し、二十年六月に新たに東京鯉節問屋組合が発足した。その初代役人は以下の通りである。

正頭取 初山半三郎

副頭取 榊原伝三郎

会計 佐久間小七・竹内弥右衛門

幹事 高崎友七・関山源三郎・高津伊兵衛・初山久八・山崎弥兵衛

浜吉組発足当初から加入していた十問屋のうち三軒が、明治二十年に東京鯉節組合の役員となっている。その一軒が関山源三郎である。関山源三郎は明治年間にも問屋業を続け、かなりの勢力を保っていたと考えられる。

これまでの調査から本屋丸屋徳藏について要約してみると以下のようなになる。万延元年、馬喰町二丁目の西村屋与八から丸屋徳藏へ問屋株が移譲された。その際経済的な後ろ盾となったのは、室町一丁目で鯉節問屋を営む丸屋(関山)源三郎であった。

この丸屋源三郎は明治二十年代まで命脈を保った有力鯉節問屋で、丸屋徳藏は維新前後に居をこの実家に移している。丸屋徳藏は、明治六年までは確実に書物問屋の名義を有していたが、明治十年前後に廃業したと思われる。よってその活動期間は、考え得る最短で万延元年から明治六年までの十三年間、長くとも二十年には満たないということになる。

以上、江戸後期から明治期にかけての問屋関連の名簿から、丸屋徳藏及び丸屋源三郎の姿が朧げながら浮かび上がってきた。次に、丸屋徳藏が実際にどのような出版物を出していたのかを調査し、出版物の側面から丸屋徳藏の特徴を明らかにしてみたい。

三

丸屋徳藏版の書物・草紙紙類は、筆者の調査の範囲では非常に数が少なかった。その最も早いものは『商貼外和通韻便宝』という書である。同書は刊記に「東都書林須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／小林新兵衛／須原屋佐助／岡田屋嘉七／和泉屋金石衛門／和泉屋市兵衛／和泉屋吉兵衛／須原屋伊八／岡村屋庄助／紙屋徳八／英屋文蔵／梶屋伊兵衛／丸屋徳造板」とあり、版元が丸屋徳藏であることは明らかである。本書は英語入門書で、ローマ字や数字の言い方などを記した全二十九丁の冊子である。そ

の刊行の目的については序文で、外国人商人との取引での誤解を避けるために英語を学ぶことが必要だと述べている。安政年間に貿易のために次々と各地で港が開かれるという時流に乗った出版であったと言える。本書の成立は、序に「安政七庚申歳二月／宝善堂主人誌」とあり、安政七年すなわち万延元年二月である。宝善堂は丸屋徳蔵の堂号である。ここでもう一度前に掲げた『諸問屋名前帳』を見ると、西村屋与八から丸屋徳蔵が株を譲り受けたのが万延元年閏三月となっており、本書の刊行と時期が前後している。恐らく正式に問屋株を受ける以前から出版準備をしていたものであろう。『商貼外和通韻便宝』は、丸屋徳蔵が名義取得を待ち兼ねて刊行した書であったと推測できる。その意気込みは、刊記にいくつも並べられた大手本屋名からも伺える。

万延元年の『商貼外和通韻便宝』に続く丸屋徳蔵の書物・草双紙類の刊行というと、筆者が原本を確認し得た範囲では文久三年の『粹興奇人伝』まで下ってしまう。

この二書の間の刊行が不明であるのに加え、文久三年以降の作も見当たらない。野崎左文は「仮名垣魯文」〔列伝体小説史〕所収・春陽堂・明30)で、『粹興奇人伝』と同年限の『三題断評判記(作者評判記)』も「馬喰町二丁目丸徳出版」だとしているが、筆者所見の四本はいずれも版元不明で、丸屋徳蔵版との確証は得られない。調査が至らず見出しなかった資料があることは当然有り得るが、現在の段階で言えるのは、丸屋徳蔵出版の書物・草双紙は、問屋株取得直後の万延元年と、その三年後の文久三年にしか見られないということである。

次に、丸屋徳蔵版の浮世絵・錦絵を追った。書物・草双紙の出版は非常に少ないことが予想される丸屋徳蔵であるが、その錦絵出版には顕著な傾向があることが判明した。丸屋徳蔵は、創始当初は橋本貞秀の描く横浜浮世絵を、その後は落合芳幾の描く役者絵を集中的に出版しているのである。

横浜浮世絵というのは、安政六年六月に開港された横浜の風景や外国人風俗を描いた一連の錦絵のことである。新興国際都市横浜に対する関心は高く、横浜浮世絵は次々と描かれ人気を呼んだ。現在までに確認された横浜浮世絵の作品数は八百四十点余、その出現期間は開港翌年の万延元年から明治五年までの約十二年間である。特徴的なのは、半数以上の作品が、万延元年と文久元年の二年間に集中して刊行されていることである。開港とそれに続く異常な好奇心の盛り上がりから横浜浮世絵を生み出し、特にその初期には圧倒的な需要があったことが伺える。

橋本(五雲亭・玉蘭齋)貞秀(文化四〜明治十二頃)は、横浜浮世絵の代表的な画家として知られる。横浜浮世絵を描いた画家は五十名を越えるが、百点以上製作した

のは貞秀を含めて三名のみである。その作品数もさることながら、空から眺めたかのような独特の構図の都市図・風景図は、その非常な緻密さも含めて高く評価されている。貞秀には草双紙の挿画も多数あり、当時から知名度の高い画師であった。彼の最も早い横浜浮世絵は、万延元年二月改印の「神名川横浜新開港図」(山口屋藤兵衛版)で、これは横浜浮世絵全体から見ても最も早い作品である。同年丸屋徳蔵も貞秀の横浜浮世絵を出しており、丸徳は山口屋藤兵衛とともに横浜浮世絵元年の版元であるという点で注目される。横田洋一氏によると、貞秀はこれ以後、精力的に横浜浮世絵を描くが、その作画は他の絵師と同じく万延元年と文久元年に集中し、この万延元年二月から文久元年九月までの一年八カ月で八十五点、すなわち彼の全横浜浮世絵の八割以上を製作しているとのことである。

丸屋徳蔵の貞秀作品の出版は、万延元年が六点前後で最も多い。ここで万延元年という年にもう一度注目してみたい。万延元年は、丸屋徳蔵が本屋業を始めた年であり、また彼が大いなる意気込みをもって『商貼外和通韻便宝』を出版した年であり、そして横浜浮世絵が貞秀によって創始された年である。『商貼外和通韻便宝』は開港後の英語の必要を見越して出された書であって、横浜開港をにらんでいた点で横浜浮世絵と通ずるものがある。丸屋徳蔵は当初から横浜開港というテーマを軸として出版業に乗り込んだのではないだろうか。ところが、横浜開港という目の付け所は良かったのだが、いざ横浜浮世絵が大当たりすると新参本屋である丸屋徳蔵は大手本屋に押されてか、かえって貞秀の浮世絵の刊行数が減ってしまった。文久以後の貞秀の横浜浮世絵の版元は、辻岡屋文助・山口屋藤兵衛・大黒屋平吉・森屋治兵衛が多く、丸屋徳蔵版は年に一、二点に過ぎなくなる。丸屋徳蔵の貞秀作品刊行の下限は、慶応元年の『江戸名所独案内』である。画材が横浜から離れ、作品数は少なくなっているが、丸屋徳蔵と貞秀の版元・画師関係はこの頃まで保たれていたようである。

丸屋徳蔵の横浜浮世絵は貞秀作品に偏っているのだが、唯一例外が存在する。一恵斎芳幾画の『横浜写真真五国大船』(文久元)がそれである。貞秀に代わって丸徳と密接な関係を持つに至った画師が、この芳幾である。

落合(一恵齋・朝霞樓)芳幾(天保四〜明治三十七)と丸屋徳蔵については、数少ない丸屋徳蔵の版本の一つ『粹興奇人伝』の画工が芳幾であったこと、また彼が明治期に丸屋徳蔵についての談話を残していること(本稿冒頭部分参照)の二つの接点を既に述べた。芳幾の最初の丸徳版作品は、前出のように横浜浮世絵だったが、二作目以降は、彼自身もそのメンバーであった三題断の粹狂連・興笑連と歌舞伎を絡めた役

者絵となっている。『茲三題漸集会』（文久二）は、両連の集会に市川小団次・坂東彦三郎・岩井条三郎が加わっている場面が描かれ、『当ル弥生の三題ばなし』（同三）は、三題漸の流行を当て込んで同年三月に中村座で上演された『花暦三題漸』の芝居絵である。更に慶応三年の『真写月花之姿絵』（広岡屋幸助と合梓）は、役者の横顔を障子に映した影絵で描くという斬新な手法の三十八枚の似顔絵シリーズだが、これにも三題漸を中心とした通人仲間が関係していると思われる。それは、相版元の広岡屋幸助が「羽扇」という号を持つ仲間の一員であり、また同年夏に同様の影絵の手法で通人仲間の肖像を描いた『くまなき影』が出版されている（広岡屋幸助版）からである。このような一連の丸徳版芳幾作品の流れの中に、前出の『粹興奇人伝』（文久三）も当然含まれるであろう。以上のように、貞秀・芳幾の二人の画師は、丸屋徳蔵を考える上での重要なポイントである。

丸屋徳蔵の錦絵からは、その所在地についても手掛かりを得ることができる。万延・文久年間の丸徳版の浮世絵には、「馬喰町二丁目丸屋徳造」「宝善堂丸屋徳造」等の表記のほかに「馬喰二／丸徳版」と書いた分銅型の家標も用いられていることから、当時馬喰町二丁目で業を営んでいたことは疑いない。先に述べたように、明治六年以前に丸屋徳蔵は室町一丁目に移動しているのだが、『御開港横浜之全図』（万延元）と『増補再版御開港横浜之全図』（元治元）が、その移動の兆候が幕末期に既にあったことを示している。この二図は、海側から横浜を望むという同一の構図で描かれた縦約六十糎・横約百八十糎の大きな作品である。両図を比べてみると、後者では描かれる建造物や海に浮かぶ外国船の数が多くなっており、万延元年から元治元年にかけての横浜の変化が表現されている。版元については、匡郭外左下部に以下のようにある。

万延元年版 書林 宝善堂 江戸馬喰町二丁目角
丸屋徳造蔵版

元治元年版 江戸書物問屋 宝善堂 丸屋徳造蔵版
製本處 日本橋室町一丁目 丸屋源三郎

元治元年版では馬喰町二丁目が消え、室町一丁目の丸屋源三郎の記が追加されている。製本處との限定付きだが、本屋業が実家の丸屋源三郎に移りつつあったと考えられる。

丸屋徳蔵は、万延元年に新興国際都市横浜をテーマとした出版業を開始した。それは商人向け英語入門書『商貼外和通韻便宝』と、貞秀による横浜浮世絵の出版であっ

た。しかし、横浜浮世絵の隆盛は僅か二年で、その後丸屋徳蔵の出版傾向は変化する。粹狂連の一員である落合芳幾の横浜浮世絵を文久元年に刊行したことが契機となったのか、文久以降は芳幾が描く幕末江戸の通人と役者に関する絵が中心となり、冊子体の『粹興奇人伝』も出している。丸屋徳蔵のこの傾向の出版は、明治直前まで見られるが、その規模は縮小し次第に鯉節商の実家に吸収されていったようである。数少ない刊行物に基づいてではあるが、丸屋徳蔵の出版活動をまとめると以上のようなになる。

四

丸屋徳蔵の背景や出版活動がある程度はつきりしたところで、最初に挙げた「条野採菊（山々亭有人）が丸屋徳蔵名義の絵双紙屋をやっていた」という落合芳幾の談話を考証してみる。有人が丸屋徳蔵自身であることはほぼあり得ないと言ってよい。彼は商家の生まれではあるが、その場所は長谷川町であり、『諸問屋名前帳』で徳蔵が「幼年」と記された万延元年、二十九歳になっている。彼はこの年、初の単独執筆作である人情本『春色恋廻染分解』を刊行しており、「幼年」では決してない。彼の履歴全般を見ても、関山姓や鯉節商との接点は見受けられない。また、江戸幕末の文化サロンには、経済的な後ろ盾となる日本橋魚河岸などの商家や、仲間内の漸本の刊行を引き受ける本屋が参加しており、鯉節商の丸屋源三郎がいてもよさそうなものだが、文献上には丸屋徳蔵に関係があるような人物は見いだせない。つまり、山々亭有人と丸屋徳蔵の名を同時に示す資料は、『粹興奇人伝』と芳幾画の丸屋徳蔵の錦絵以外に見当たらないのである。

丸屋徳蔵の刊行物は数が少なく、それらだけをもとに考察するのは無理があるので、少し違う方向からの検討を加えたい。まず、『粹興奇人伝』のように江戸の通人グループが共同執筆した他の作品はどういった版元から刊行されていたのだろうか。以下が共同執筆の作品中、版元が判明するものである。

駄洒落早指南（文久二） 藤岡屋慶次郎
春色三題漸（元治元） 文玉堂全語
鳴久者評判記（慶応元） 足立徳三郎・染谷藤七・白縫功助
くまなき影（慶応三） 広岡屋幸助
浪輝黄金鯰（慶応三） 広岡屋幸助

藤岡屋慶次郎は、幕末・明治の大手本屋として知られるが、『駄洒落早指南』には自

らも作品を寄せるなど、通人との接触も多かった。文玉堂全語は『くまなき影』にも名前が見られ、三題断や興画合に熱心に参加した一人であった。『鳴久者評判記』はお互いの失敗をすっぱ抜く仲間内の悪摺りの評判記で、版元の三者ともその遊興に加わっている。広岡屋幸助は白縫功助と同一人物で、先に少し触れたが、彼の号である羽扇は三題断や興画合に関する資料の至るところに出てくる。このように、彼らの共同制作作品は仲間内の版元から出されているのである。とすれば、『粹興奇人伝』の版元丸屋徳蔵にも、やはり彼らと何らかの関係がある人物が係わっていたと考えた方が自然だろう。

次に、丸屋徳蔵と山々亭有人を直接的に結ぶ線はなくとも、間接的に繋がり得る可能性を考えた。丸屋徳蔵から錦絵を出した貞秀・芳幾と有人は浅からぬ縁があり、彼らを通じて両者が接触したことは想像に難くない。有人・芳幾の両者は三題断等の遊興で絶えず交流しており、有人作・芳幾画の作品もある。一方貞秀とは、有人輯・貞秀画の読本『真柴勲功函絵』（文久三）、有人序・貞秀編画の合巻『真柴軍功記』（元治元―慶応元）の二作で顔を合わせている。この二作の成立は『粹興奇人伝』等より遅いので、有人が丸屋徳蔵を知ったのは貞秀を通じてだとは言いつてもいいが、丸屋徳蔵、芳幾・貞秀、有人をつなぐ線を引くことは可能である。

以上山々亭有人と丸屋徳蔵の関係について考察したが、それを明らかに示すような決定的な事実は見いだすことができなかった。状況証拠とも言うべきものはいくつもあるのだが、結論を導くには不十分である。冒頭に掲げた芳幾の談話は、有人の長年にわたる友人による大変魅力ある発言なのだが、全面的に信頼するには不安が残る。

例えば、談話後半部分にある「羽左衛門の錦絵の出るのは、この丸徳に限る」というようなことは確認できないのである。思うにこの発言が掲載された『五世尾上菊五郎』が刊行された明治三十六年、芳幾は七十歳、記憶に齟齬があつても不思議はない。現段階で言えることは、横浜に焦点を当てた出版活動をしていた丸屋徳蔵が、横浜関連の出版が下火になった時、何らかの形で江戸の通人達と知り合い、彼らに関する出版物を出すようになったということ、その際丸徳との交渉に当たったのが山々亭有人であった可能性があるということ、の二点である。

本稿では、明治維新前後の本屋の変遷を具体的に追うことをもう一つの目的としていたが、これはかなり明らかになったのではないかと思う。有力商人が経済力を生かして出版業に進出するというのは、容易に想像できることだが、鯉節商丸屋源三郎が有名無実となっていたかつての大手書物・地本双紙問屋西村屋与八の問屋株を得てい

たという事実からその具体例を提示することができた。丸屋徳蔵は漫然と本屋業に進出したのではなく、国際都市横浜を出版の主眼とする方針を持っていた。新興本屋は、既存本屋とは異なる特色のある出版物を創出するという戦略を持っていたのである。そして、第一のテーマであった横浜に見切りをつけた後には、江戸遊興仲間との接点を得て出版内容を一新しているのである。

『諸問屋名前帳』類によれば、幕末の江戸には書物問屋が百七軒・地本双紙問屋が二百一軒存在していた。その中には、数多くの書物・草双紙を刊行した大手本屋や、明治年間に業を継続・発展させた有力本屋もある一方、わかるのは名前のみで出版物も廃業時期も不明という本屋も少なくない。今回調査した丸屋徳蔵は、その存続期間も十数年という短期間であり、どちらかと言えば後者に含まれる本屋であろう。このような目立たない本屋であっても、調査が進むに従って次第にその姿が見えるようになってきた。幕末の一新興本屋を追う過程で、異業種から出版業への進出はいかに行われたか、横浜開港といった時事をいかに出版に取り込んだか、江戸の文化人グループと本屋はいかに関わっていたかなどの課題が次々と現れ、出版以外の分野にも目配りしなければならぬことを痛感した。これらの課題はそれぞれ単独で研究するに値する課題であるが、今回は丸屋徳蔵を追跡することによって主眼をおいたため十分な考察を行っていない。今後はこれらを深めることによって、幕末から明治初期の出版・出版人の諸相を浮かび上がらせてみたいと考えている。

注

- (1) 丸屋徳蔵は、徳蔵もしくは徳造と表記されるが、本稿では煩を避けるため、引用部分以外では徳蔵で表記を統一する。
- (2) 『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店・平11）では、西村屋与八の実際の出版活動は天保十年頃までとしている。また、矢島玄亮『徳川時代出版社出版物集覧』（万葉堂・昭51）、井上隆明『改訂増補近世書林板元総覧』（青裳堂・平10）では、嘉永元年を出版の下限としている。
- (3) 例えば『増補再版御開港横浜之全図』（元治元）には、「江戸書物問屋 宝善堂 丸屋徳造蔵版」とある。
- (4) この廻章の写真は、牧野善兵衛『徳川幕府時代書籍考』（ゆまに書房・昭51）、翻刻は弥吉光長『未刊資料による日本出版文化 第三巻 江戸町奉行と本屋仲間』（ゆまに書房・昭63）にある。
- (5) 例えば、番付『諸品商業取組評』（錦誠堂・明12）、『東京商人録』（丸屋善七他・明13）、復刻湖北社・昭62）、『東京書林組合員名簿』・『東京地本錦絵営業者組合名簿』（ともに明14）のいず

れにも丸屋徳蔵はない。

(6) 『諸問屋名前帳』の地本双紙問屋(本組)の糸屋福次郎の条では「福次郎死去後(略)同人父庄兵衛相続」とあり、実父とは書かれていない。また、『諸問屋名前帳』には悻の他に養子という表記があるが、この二つが厳密に使い分けされているのかどうかは不明である。

(7) 文化十年の鯉節塩干肴問屋組合の名簿は、「かつをぶし」(東京鯉節問屋組合・昭13)によつた。

(8) 明治二十年以後の丸屋(関山)源三郎については、明治二十五年の『日本全国商工人名録』には「鯉節問屋兼海草及魚問屋 丸屋/関山源三郎/日本橋区室町一十一」(鯉節商并結納婚礼諸品干鯛商 丸屋/関山亀吉/日本橋区品川裏河岸二)とある。しかし、明治三十一年の『日本全国商工人名録』にあるのは「鯉節問屋(兼海産物問屋) 丸屋/青木惣吉/品川裏河岸」のみで、室町一丁目店はこれ以前に廃業したようである。

(9) 尚、本書には改題本『和英通韻以呂波便覧』が存在する。版元・成立年については、表紙見返しに「土佐海援隊蔵板」、序に「慶応四年戊辰三月 尚友堂主人誌」とある。慶応四年すなわち明治元年に、八年前に丸屋徳蔵所蔵であった板木が、いかなる経緯で土佐の海援隊のもとに渡つていたのかは不明である。

(10) 『横浜浮世絵と空とぶ絵師五雲亭貞秀』(神奈川県立博物館・平9)の出品目録では、万延元年刊の『横浜土産』(仮名垣魯文著・貞秀画・版本五冊)を丸屋徳蔵版とするが、筆者の所見本は鳳来堂(住吉屋政五郎)版であった(表紙見返しによる)。閲覧の機会を得ることはできなかったが、神奈川県立博物館所蔵本は丸屋徳蔵版か。

(11) 横浜浮世絵については、主に以下の文献を参照した。

樋口弘『幕末明治の浮世絵集成』(味燈書屋・昭30)

横浜市総務局広報課『横浜絵とその所在目録』(横浜書屋・昭32)

横浜市立図書館『横浜市立図書館蔵書目録 横浜絵・絵図編』(昭33)

丹波恒夫『横浜浮世絵』(朝日新聞社・昭37)

神奈川県立近代美術館『神奈川県美術風土記・幕末明治初期篇』(有隣堂・昭45)

神奈川県立博物館『集大成横浜浮世絵』(有隣堂・昭54)

『みづゑ』特集横浜絵・919号(昭51・10)

横田洋一『横浜浮世絵』(有隣堂・平元)

『横浜浮世絵と空とぶ絵師五雲亭貞秀』(前出)

(12) 注(11)前掲書。

(13) 明らかに丸屋徳蔵版であると確認できるものは、『御開港横浜之全図』・『東海道写真五十三次勝景』・『玉板油絵 大胡弓 笛二線』・『横浜商家荷物之内 珊瑚樹 クロンボウノ図』・

『銅板絵上彩色』・『岩亀楼』(三代豊国と合作)である。根拠不明であるが丸屋徳蔵版とされているものは、『東海道名所之内横浜風景』(横浜開港資料館目録による)・『横浜土産』(注(10)参照)である。

(14) この他、役者評判絵『花競昇勝業』(元治元・画師不明)にも、図中に「丸徳」印が見られる。但し、『浮世絵に見る歌舞伎 幕末明治の名優たち』(たばこと塩の博物館・平8)は、本作品を版元不明としている。

(15) 彼が商家の出であることは「予は原来実業家の舗居の下に胞衣を埋たる身なりしかど」(『早稲田文学』明26・5)から、出生地については「東京市日本橋区長谷川町に生る」(『太陽』明28・6)から確認。

(16) 『国立劇場所蔵芝居版画等図録』Ⅲ(昭59)・Ⅳ(平2)によると、芳幾画の十三世羽左衛門の錦絵の版元には、近江屋久助・久次郎(文久二)・古賀屋勝五郎(元治元)があり、四世市村家橘襲名後のものも伊勢屋利兵衛(慶応元)から出されており、丸屋徳蔵に限られていたわけではない。

平成十一年度生 国際日本学専攻 (一九九九年十二月二日受理)

A Research on Maruya Tokuzo, a Publishing Company in Edo during at the end of the Edo Era

TSUCHIYA Momoko

Maruya Tokuzo, a publishing company in Edo during the *Bakumatsu* (the end of the Edo era), was the publisher of *Suikyokijinden*. This book is recognized by Japanese scholars as very important material because it tells much about two literary groups, the *Suikyoren* and the *Kyoshoren* which headed the literary world in Edo at that time. Ochiai Yoshiiku, a *ukiyo*e painter, said Maruya Tokuzo was owned by a novelist, Sansantei Arindo. Both Yoshiiku and Arindo were members of the *Suikyoren*. I examined information by Yoshiiku and investigated the history of Maruya Tokuzo. As a result of the research, I found: its predecessor was a famous publishing company, Nishimuraya Yohachi; Maruya Genzaburo, a wealthy dried skipjack wholesale dealer, was Maruya Tokuzo's father and patronized his son's company; Maruya Tokuzo focused on a newly-opened international city, Yokohama. Although there is not definite evidence of the relationship between Maruya Tokuzo and Sansantei Arindo, most books written by the *Suikyoren* group and the *Kyoshoren* group were produced by publishers who had some connection with the groups. Therefore there is a good possibility that Maruya Tokuzo was also operated by a member of the groups.